エピソード4　セクハラ教師を誘拐してみた

「ん、んぐっ……？」
　男性教師の徳沢　大樹（とくざわ　だいき）はやっとのことで目を覚ました。彼は目を瞬かせて周囲を見渡す。そこは薄暗い部屋の中、照明の類は何もなく、小さな天窓から僅かな光が差すのみであった。家具やカーペットなど人間味のある代物は悉く駆逐されており、木で造られた簡素な椅子とテーブルが一つずつだけそこにある。部屋自体が石でできているようで、温かみは欠片もなくその床はひどく冷たかった。まるで牢屋のよう、というか牢屋そのものであるように思えた。
　大樹は落ち着いて前日のことを思い出す。その日、女子校の体育教師である彼はいつも通りに女生徒にバレない程度のセクハラを働き、うら若き乙女の柔肌を堪能していた。そして、何の変わりのない一日を過ごしたはずであった。どうしてかような場所にいるかはどうにも思い出せなかった。ある部分から記憶が消失していたのだ。
　そして、大樹はさらなる驚愕の事実に気がついた。彼は全裸の状態で縄によって雁字搦めにされており、それに加えて口にギャグボールが装着されていたのだ。彼は全力でその状態からの脱出を図ったが、どうにもならなかった。
　大樹は深いため息を吐く。その時、ガチャリと部屋の鉄扉が開いた。
「あら、目が覚めたのね」
　そこから現れたのは信じられないほどの美少女であった。艶やかに舞う漆黒の黒髪、雪のように白い肌、目を見張るほどの美貌、完璧な黄金比を辿るスタイル、それにばっちりと見合った制服、これほどの美少女は大樹が今までに出会ってきた中で一人しかいなかった。
――ウチの生徒の小野原　来夢か！
　大樹は目を見開いて驚いた。どうして彼女がここにいるのか、と。
「こんにちは、先生。私は……って自己紹介をするまでもないですよね」
「ふぎょ、ひゅごごっ」
「あははっ、しゃべられないはずなのに、なに言ってるかなんとなく分かりますよ。どうしてこんなことになってるかって聞きたいんですよね？」

そう言って天真爛漫な笑みを浮かべる来夢に、大樹はただただ頷くしかなかった。
「ふふっ、私はですね。あなたを少し懲らしめてあげようと思ってるんです」大樹に詰め寄りながら来夢は言う。「先生はまだバレてないと思ってるかもしれませんが、もう噂になってるんですよ？　先生がこっそりと私たちのお尻やおっぱいを触ってるってこと。私たちが露骨に嫌がってるの気づいてなかったんですか？　いや、それとも気づきながらもそれを楽しんでいたのかしら。ま、どちらにせよ、先生がセクハラ教師だってことには変わりありません。ねぇ、そうですよね、先生？」
笑みを崩さずに問い詰める来夢に、大樹はただならぬ恐怖を感じた。まさかバレているなんて――思いもしない事態であった。彼には自分が狡猾にセクハラ行為を働いてきたという自負があったからだ。彼の頬を冷や汗が伝った。
パニックになりながらも大樹は誤解を解こうと、首を振って来夢に否定の意志を伝える。しかし――
「先生、とぼけるんですかぁ？」
顔を大樹の鼻先に接近させて来夢は言う。
「たしかに列記とした証拠はありませんが、証人はいくらでもいるんです。先生、セクハラのことをチクらないような大人しそうな子ばっかりを選んで触ってたでしょ？　本当、最低ですよね。先生、その子たちのこと考えたことあります？　皆、あなたのこと本当に怖がってたんですよ？　教え子にトラウマ植え付けるなんて、教育者として完全にどうかしてますよねぇ。ええ、私もしっかり覚えていますよ。あなたがセクハラした時のこと。お尻や胸を触るあのいやらしい手つき。今、思い出しても鳥肌が立ちます。これから私に恋人ができて、一緒に肌を触りあった時、毎回あなたの気色悪い感触が脳裏に過ってしまうかもしれません。そうなったらあなたは責任をとってくれるんですか？　ねぇ先生、どうなんですか？」
「む、むぐ……」
「あらあら、ぐぅの音も出ない感じですか。それじゃ、セクハラを認めたってことでよろしいですね？」
「む、むぅっ！」
もはや言い逃れのできない状態であったが、大樹は首を振って強情

にもセクハラを否定した。
　そんな様子の大樹に来夢は表情を一変させる。爛々とした笑みから身も凍るような冷酷な微笑に……。
「そう、そうやって嘘を吐くんですね。先生ってホントに教師として失格、いや、人間として失格なんですね。……でも、大丈夫ですよ、先生」来夢は耳元で囁く。「先生がマトモな先生になれるよう、私がきっちりお仕置きしてあげますから」
　来夢はそう言って思いきり腕を振り上げると、大樹の頬に平手打ちを食らわせた。

パアンッッ！！

「ふぎょあっ！！」
　為す術無くビンタの直撃を受けた大樹は情けない悲鳴を上げる。彼の頬には来夢の手の跡が赤く刻まれていた。どうやら彼女は微塵の遠慮もない全力の平手打ちを放ったようである。その痛みも尋常ではなく、叩かれた大樹の目に涙が滲んだ。
「こんなもんで許されると思わないでください。それっ、まだまだいきますよ」

ビシィッ！　バシッ！　パアンッ！　スパアンッ！

「ぎゅぅあああっ、むぎゅぅあああっ！！」
　息つく間ない連続ビンタが炸裂する。手の平と手の甲が順に大樹の頬に直撃する。まるで風船が破裂したかのような鋭い音が、部屋中に響き渡る。彼女のしなやかな手は鞭のように空気を裂きながら彼の頬を優雅に痛めつける。彼の両頬は見る見るうちに真っ赤に腫れ上がってしまった。苦い血の味が口の中を支配した。
　それでも、来夢はビンタを続けた。彼女は頬を朱に染め、男性を一方的に痛めつけていることに恍惚としながらただただひたすら殴打した。もはやお仕置きという範疇はすでに超越しているようにも伺えるが、しかし彼女の手は止まらなかった。お仕置きを称した暴虐によっ

て大樹の顔面を蹂躙するのであった。
やがて、数十発ものビンタを叩き込んだ後、来夢はやっと手を振り上げるのを止めた。彼女は息を荒げながら薄っすらと微笑んだ。
「はぁ、はぁ、ふ、ふふふ……先生、素敵なお顔になりましたよ。元々のゴリラみたいなむさ苦しい顔から、ほら、アンパンマンみたいな愛らしい顔になれましたね。先生、感謝してくださいねっ」
「ふ、ふぎゅぅぅぅぅ〜〜」
大樹はあまりの激痛に縷々と涙を流す。もはや教師としての面目は欠片もなかった。
「あははっ先生泣いてる〜〜。でも、泣いても無駄ですよ。まだまだお仕置きは始まったばかりなんですから」と言うと、来夢はからからと笑いながら大樹のペニスに足裏を添えた。
「さて、先生、私がこれからなにをするか分かりますか？」
来夢は目を細めながら大樹に訊ねた。
「む、ふむぅ、むぅ〜〜」
「あはっ、その怯えた顔、とっても可愛いですよ、先生。どんなことされるかもう分かっちゃったんですね？　大丈夫ですよ、先生。潰したりはしませんから。**あ、でも、もし間違って潰れちゃったら、その時は許してくださいねっ**」
来夢はそう言って微笑みながら――足を高速で振動させた。

ドガガガガガッ！！

「むがァァあァあァぁァァあっ！！」
来夢の強烈な電気あんまにより、大樹は白目を剥きながら悶え苦しんだ。耐え難い鈍痛に思わず断末魔の叫びを上げてしまう。強い。あまりに強すぎる。竿がひん曲がり、睾丸が粉々に粉砕されるかのような滅茶苦茶な痛み。彼女の足がペニスを踏みつける度に体が大きく痙攣する。口から泡が溢れ出す。
「あははっ、先生、いい声で鳴くんですねぇ。ほら、もっともっといきますよ〜〜」

ドガガガガガガガガガッ！！

妖艶と狂気を纏った蠱惑的な表情で来夢は彼のペニスを踏み躙る。彼女の足は岩盤を掘削するかのような勢いで振動し、その威力はビンタなどまだ序の口だったということを思い知らざるを得ないほどのものであった。踵で睾丸を殴りつけ、足裏で肉棒を擦り潰す。何一つの躊躇もなく徹底的に彼のペニスを破壊する。

「それぇ～～もっともっともっと～～」

来夢は息を荒げながら足の上下運動を続ける。大樹の頭を掴み、より電気あんまのしやすい体勢を作ると、さらに凄まじい勢いで彼のペニスをいたぶる。

「むがぁぁあああぁぁあ～～～～ぶぅあああああ～～～～～！！」

さらに凶悪になった痛みに大樹は耳を劈くような悲鳴を上げる。今すぐにでも『ごめんなさい』と来夢に謝罪したいところであったのだが、装着されたギャグボールのせいで許しを請うことができない。また、彼女の足から逃れようにも、縄でギチギチに縛られているためにどうすることもできない。地獄の隘路に追い込まれた彼は涙を流して絶望する。ペニスの激痛にただただ苦しむ。

しかし、そんな大樹の心情とは裏腹に彼のペニスは異常な反応を見せていた。なんと、耐え難い激痛にも関わらず、彼のペニスは勃起していたのだ。

「あら、うふふ……」大樹の勃起を認めた来夢は官能的な微笑を見せる。「先生、私の電気あんまで興奮したんですね～。ほら、先生のおチンポ、ガッチガチですよ～。先生のチンポって短小で包茎の癖に硬さだけは一丁前なんですね。お子ちゃまチンポがピンピ～～～ンってなっちゃってます。あはは、生徒にミニミニマゾチンポ踏まれて喜ぶドＭ教師さん。ほんっっっっっっとうに気持ち悪いですね。反吐が出ます。死んでください、クズ野郎」

来夢は満面の笑みで辛辣な言葉を吐き捨てる。そして、足を思いきり振り上げると、今までで最も強い力で大樹のペニスを踏み潰した。

グシャッッッ！！

「だえｒｗｂｗｖｆｑｒヴぁｗだｓｃｄｗｑｆｑｆっｑｃｑｃ～～～～～～～～～！！！！」
声にならない悲鳴を上げると、大樹は目を回しながら小刻みに痙攣した。あまりに強烈な一撃に頭が真っ白になってしまったのだ。意識が混濁とし、視界がボヤける。気絶寸前といった様子であった。
しかし、不幸中の幸いか、大樹のペニスはまだその機能を保ったままであった。あまりの刺激に真っ赤に腫れ上がっていたが、まだ元気良く勃起したままであった。
その様子を見て、来夢は楽しそうに微笑む。
「あらあら可哀想に。あまりの嬉しさに気絶してしまいそうなんですね。でも大丈夫ですよ～。……私が今すぐ**目覚めさせてあげますから**」
来夢はそう言って靴下を脱ぐ。
そして、それを大樹の鼻に押し付けた。
「むぐっ！？　むがぁぁぁぁぁぁ～～～！！」
意識を朦朧とさせていた大樹であったが、彼の意識は瞬く間に覚醒してしまった。というのも、彼の鼻腔がとてつもない臭気を知覚したためであった。鼻が内部から破壊されていくような凄まじい臭さ。汗汁と納豆をミキサーにかけ、そこに腐ったチーズを放り込んだような途方もない悪臭であった。彼はなにをされたのかさっぱり理解できなかった。訳も分からず、鼻先の激臭にただ悶え苦しむばかりであった。
「先生、どうかな？　ねぇ、私の靴下、どんな臭いする？」来夢は耳元で大樹に囁く。「酸っぱい臭い？　納豆の臭い？　それとも銀杏の臭いかな？　先生、どうなの？　教えてよ、私の靴下の臭い。クサい？　クサいよねぇ。うふふ……」
――靴下？　こ、これが小野原の靴下の臭いだって？
来夢の言葉に大樹はひどく動揺する。美人女子生徒として名を馳せている彼女の靴下がこれほどまでに臭いなんて。にわかには信じ難い事実であった。
しかし、大樹はそこに強烈な性的興奮を覚えた。清楚で美麗な来夢がその美脚から凄まじい悪臭を放っているというギャップが彼をどうしようもなく高ぶらせたのだ。そして、その激臭靴下によって虐められているという情けなさが彼のマゾ心を巧みに刺激した。彼は鼻を鳴

らして湿った靴下の臭いを嗅いだ。これだけ臭い靴下も、来夢の履いていた靴下だと思えば、天に昇るほどの芳醇な香りだと思えるから不思議であった。
　靴下臭に陥落したことを察知した来夢は追い打ちとばかりに甘く囁く。
「ねぇ、先生。どうしてそんなに鼻を鳴らしてクンクンしてるんですか？　私の靴下臭くないんですか？　そんなわけないですよね、臭いですよね、私の靴下。だって、その靴下、二週間は履きっぱなしなんですもの。私の汗が煮詰まって酸っぱ臭ぁ～～～くなってますよね。先生、私の足、臭くてごめんなさい。こんな足の臭い女の子なんて最低ですよね。ごめんなさい。臭くて本当にごめんなさい」
　目を涙で潤ませながら来夢は大樹に謝った。
　その仕草に大樹はどうしようもなく心を打たれてしまった。彼は心酔しながら来夢の靴下の臭いを嗅ぎ惚れた。
「ひゅごひぃごっんむぐ～すんすん、んぐぅ～～」
「ふふ……」
　来夢はにやりと微笑みながら大樹のペニスに手を伸ばした。そして、ゆっくりとその肉棒を扱き始めた。
「んぐぅ～～むががぁ～～～～」
「先生、ほらほら。そんなに私のクサクサ靴下の臭いがいいなら、もっと嗅いでください？　鼻を鳴らしてしっかりクンクンするんですよ？」
　来夢はそう言いながら、大樹のペニスにさらなる刺激を与えていく。彼のペニスの皮を剥き、無理矢理亀頭を剥き出しにさせてしまう。そして、もうすでに先走り汁を漏らしている敏感な亀頭を親指と人差し指で捻りながら、竿部分を上下に扱き続けた。彼のペニスは勃起状態でも七センチ程度であったため、弄るのは片手だけでも十分であった。
「先生、嗅いでください。私の靴下臭をもっともっとお鼻に詰めてください。ねぇ先生、臭いでしょう？　私の靴下、滅茶苦茶臭いでしょう？　ねぇ嗅いで、臭い靴下。汗塗れのくっさ～～～い靴下。もっともっともっともっと臭いをいっぱい吸い込んでください」
「むはぁむはぁ、ああ、むがぁぁああっ」
　大樹はあまりの臭いに悶えながら、それでも靴下の臭いを嗅ぎ続けた。鼻を鳴らし、湿りに湿ったその臭気を吸い込み続けた。靴下の激

臭もさることながら、来夢の扇動が彼の興奮をさらに掻き立てた。来夢の『臭い』という言葉が彼の胸を大きく高鳴らせるのだ。
「ほら、ここの爪先の部分なんか特に濃厚でしょう？　知ってます？　女の子の爪先や足の指の間って汗とか垢とかがすっごい溜まってるから、滅茶苦茶くっさ～～～いんですよ？　酸っぱ臭い香りがぷぅ～～んってしちゃうんです。汚いですよね～、臭いですよね～～。たまんないくらいくっさいですよね～」
　猫撫で声で誘惑しながら来夢は大樹のペニスにさらなる刺激を与える。彼女の右手のスピードはさらに早くなっていく。カウパー液で潤った彼のペニスはグチュグチュグチュグチュ――と淫靡な音色を奏でながらさらに汁を漏らす。小刻みに痙攣する彼のペニスを見て、彼女は口元を釣り上げた。
「先生、私の靴下の臭いで本当に興奮しちゃったんですねぇ。ホントに気持ち悪～～い。ほら、イクんですか？　私の靴下の臭い嗅ぎながら粗相しちゃうんですか？　マゾで臭いフェチの変態教師なんて、どうしようもないくらい最悪ですよ？」
「んぐ、むぐぐぅぅぅぅ～～～！」
　鼻に突き刺さる臭気とペニスの刺激が快楽の渦を生み、大樹を理性ごと飲み込んでいく。もはや来夢の責めに耐えることはできない――
「ほらほら、出ちゃいますよ～～。白いおしっこぴゅっぴゅしちゃいますよ～～」
「むぐぅあああっ！　ふごっ、ふぎょあああっ」
「あはは、先生、すごい声ですね。そんなに気持ちいいんですか～～。私の靴下嗅ぎながら扱かれるのがそんなにいいんですかぁ？」
　グチュグチュグチュグチュコチュコチュコチュコ――
　熱湯のような熱さを伴いながら濃厚な精液がずぷずぷとせり上がる。強烈な快感のスープが大樹の脳に染みこんでいく。出る、出る、出ちゃう、もう出ちゃう――大樹は目を瞑って必死に射精を堪えようとするが、濁流のごとき精液は彼の意志に反してその勢いを留めない。射精欲求が大波となって彼を飲み込む。
「ああ、先生、出しちゃうんですか？　生徒のクサクサ靴下嗅ぎながら精液お漏らししちゃうんですかぁ？　あはっ、この変態ゲロマゾ教師ぃ、女子〇生に扱かれながらさっさとイッちゃってくださいっ」
「んむぐっ、んんむぅぅぅぅぅぅっ！！」

「いいんですよ？　先生、もうイキたいんでしょう？　ねぇ、出して？　おチンポミルク出して？　イッて？　イッて？　私のくっさい靴下嗅ぎながら、ビュルビュル精液出して？　ねぇ、先生、先生っ」
　来夢は頬を淫靡に染め上げながら大樹のペニスを乱暴に滅茶苦茶に扱く。その強烈な刺激に耐えられるはずもなく――
「～～～～～～～～～～～～ぅぅぅぅぅ！！」

びゅつびゅぅぅぅぅぅ～～ぴゅるるるっドピュッドピュッぴゅぅ～～

　大樹はとうとう為す術無く射精した。熱を滾らせた大量の精液が彼の真っ赤な亀頭から鉄砲のような勢いで噴出する。強烈な快感が錐のような鋭さで彼の脳天に突き刺さり、その刺激に彼は大きく腰を震わせる。そして、白目を剥きながら次々と濃厚な精液を搾り出す。焼き付くような快楽が彼の全身を巡り巡った。
「あははっ、出てる出てる。精液たくさん出ちゃってますねぇ」
　来夢はうっとりしながら大樹の情けない射精姿を眺める。飛び散る精液もなんのその、彼女はさらに彼のペニスを扱き続け、より大量の精液を搾り取ろうとする。
　そして、彼女の蛇のような白い手に導かれるまま、大樹は精液を漏らし続けてしまう。本能の赴くまま、ただただ快楽の海に溺れていく。
「ん、んむぅぅぅぅぅぅ～～！　むぅあぁぁぁっ！！」

ビュクビュクッ　どぴゅっどぴゅっぴゅるるっぴゅっ　どくどくっ

　打ち上げられた魚のように体を跳ねさせながら大樹はさらに射精する。歯止めのきかない快感に脳が蕩けていく。常軌を逸した濃密な絶頂が彼の肉欲を溶かしていく。酩酊したかのように視界がぼやけ、前後不覚状態となる。刷毛で塗られたかのように、頭の中は真っ白であった。
　そして、隙間を埋めるかのように来夢の靴下臭が大樹の意識に侵入する。その激臭はもうすでに彼にとって官能的な芳香であり、快感を相乗させる一要因と化していた。彼は無意識に鼻を鳴らしてその臭い

を嗅ぎとっていく。来夢の強烈な足臭によって性的興奮をさらに高めていく。
やがて――

びゅる……びゅるるっ……どぴゅっ……どろぉ

幾度とない躍動の末、大樹はとうとう渦巻く精液を全て搾り出した。白濁色の子種は四方八方に飛散し、青臭い香りを放ち始めた。彼のペニスは精液に包まれながら、蛇の抜け殻のように横たわった。
当然ながら来夢も大樹の精液に塗れていた。彼女の手には大量の精液が付着していた。
「ふふ……ふふふ……」
来夢は狂喜に満ちた笑みを浮かべながら手についた精液を舐めた。そして、靴下を彼の顔からやっと解放した。彼女は虚ろな表情で俯く大樹の顔をそっと持ち上げると、その目をじっと見つめた。
「先生、出しちゃいましたねぇ。私の靴下嗅ぎながらビュクビュクおチンポミルクお漏らししちゃいましたねぇ。うぅえっ、精液臭ぁ～～い。ふふっ、先生ってば、こんな醜態晒して恥ずかしくないんですか？ 教え子に情けない射精姿を見られちゃったんですよ？ ミニミニおチンポぷるぷるさせて、ドッピュンするとこ見られちゃったんですよ？ 私がもし先生だったら、恥ずかしさのあまりに舌を噛み切って自殺するでしょうね。先生は平気なんですか？ 人前でお漏らししてもなんとも思わないんですか？」
「ふ、ふごぉ～～……ふごぉ～～～」
「あはは、目ぇトロンとさせちゃって。もう先生には羞恥心なんてないんですね。これじゃあもう人じゃなくてただの豚ですね。先生はチン汁ぶち撒けてアヘアヘ善がってる、女子高生の足の臭いがだ～～い好きな変態豚野郎です。こんな豚を好きになる人なんているんですかねぇ。いるわけないか、あははっ。全く、そんなんだから先生はこの歳になっても童貞なんですよ、分かってますか？」
「っ！！ ふ、ふぐぅぅ～～」
「情けない声出ちゃいましたね～～。女子〇生に蔑まれて悔しいですか？ 恥ずかしいですか？ でも、先生はもっと罵倒して欲しいんで